欠下城跡（かけしたじょう）

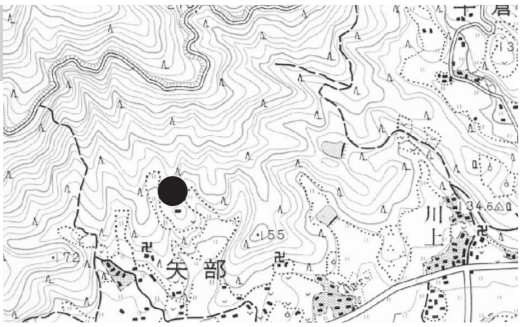
所　在　地　新城市矢部字欠下地内
（北緯34度55分27秒 東経137度30分17秒）

調査理由　第二東海自動車道横浜名古屋線

調査期間　平成22年10月～平成23年3月

調査面積　2,500㎡

担　当　者　松田　訓・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「三河大野」）

調査の経過　発掘調査は、第二東海自動車道横浜名古屋線の建設に伴う事前調査として、中日本高速道路株式会社豊川工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　本遺跡は新城市の中央部に位置し、地形的には、豊川右岸の雁報山から南東にのびる丘陵の中腹に立地している。調査区は、欠下城址の北西に位置する丘陵上の平坦面とその東西野谷部にあたり、遺構検出面の標高は100mから120mで、東西の谷は比高差5m～10m程である。

調査の概要　調査区は欠下城址北西の沢部を10A区、その南側を10B区、10B区の東沢部を10C区として調査した。基本層位は地表より深さ0.5m～1.2mの表土（腐植土）層とその下にある近年の整地・盛土層があり、その下にて近世後半以後の主に水田造成とその整地・盛土層が0.2m～2.0m程あり、その下に中世以後の遺構や遺物包含層が基盤層の上に堆積している。遺構の検出は1面を近世後半以後の整地・盛土層上面にて行い、2面を基盤層上面にて行った。

10A区全景（2面、正面に欠下城址、北西から）

その結果、10A 区において古代から中世の遺物を包含する沢を埋める流れを 3 条（04NR・05NR・10NR）と沢の東側にて土坑 10 基、柱穴 20 基を検出した。土坑の中で 06SK からは、人骨と思われる骨片と土師器小皿 2 点が出土し、墓地の一部にあたるものと思われる。10B 区においては 10A 区の北から流れる沢の堆積が東西に分かれることが判明し、中央部平坦面にて欠下城址側を区画する堀切が 2 条と土坑と柱穴約 200 基を確認した。堀切の溝 2 条はともに幅 5m 程の横断面逆台形のものであり、欠下城址側から外につながる陸橋と考えられる地山の削り残し部分があった。堀切の溝の時期は室町時代のものである。10C 区では 10A 区からのびる沢の堆積物があり、中世の遺物が確認できた。

ま と め　今回の調査では、文献資料からは不明であるが、地元にて「欠下城址」とされる丘陵の北西を調査した。調査では城跡と明確にいえる資料は確認できなかったが、10B 区の西丘陵上平坦面にあった勅養寺観音堂との関連がある道具瓦や勅養寺の前身である中福寺の伝承に近い古代～中世の遺構・遺物が確認できた。（蔭山誠一）

10Ab 区骨が出土した土坑（東から）

10B 区鎌倉時代の小皿が出土した柱穴（東から）

10B 区羽釜形土師器が出土した土坑検出状況（南から）

10B 区西側沢部（北西から）